# 私の酪農人生

国立大学法人宮崎大学　農学部　畜産草地科学科　3年　税所　太一

「じゃあ、将来はお父さんの跡を継いで酪農をするの?」

「はい!継ぎます!牛が好きなので!」

迷いなく答えることができていたこの質問。いつ頃からでしょうか。牛を嫌いになったわけでも、父を嫌いになったわけでもありません。それなのに歳を重ねるにつれ、胸を張って「家を継ぐ」と言えなくなった自分が、ずっと嫌いでした。

私は熊本県球磨郡錦町にある酪農家の長男として生まれました。我が家では育成・搾乳合わせて約70頭の牛を父、母、叔父の3人で飼養しており、私も幼いころから両親に連れられて牛舎に通っていました。小学生になると餌やりや哺乳などの簡単な作業を手伝い始め、餌やミルクをあげると嬉しそうにする牛を見て「毎日牛と触れ合える仕事って最高だな。私も酪農家になりたい!」と感じるようになりました。

しかし、中学生になると酪農は決して楽な仕事ではないことを知り始めました。生き物相手の仕事であるため長い休みが取れず家族旅行にも行けないこと、夜中であってもお産があれば牛舎に駆けつける必要があること。私の父は、私が起きるころには牛舎に向かい、私が寝るころに帰宅する。私も野球部に所属し忙しくなり、父と話す機会がどんどん減っていきました。しかし頭のどこかで「将来は牛と共に仕事がしたい」という強い思いがあったため、高校は野球をしながら畜産について学ぶことのできる地元の農業高校に入学しました。

希望を持って入学した高校で待ち受けていたのは、日本における酪農業の現実でした。暑さに弱い乳牛は夏になると乳房炎になりやすいこと。家畜伝染病が発生すると健康な牛も含めて全ての牛が殺されてしまうこと。このようなリスクと隣り合わせになりながら、朝早くから夜遅くまで仕事をしているにも関わらず牛乳取引価格は安く、飼料費は上昇し続けている。この仕事、私は跡を継げるのか?酪農業の現状を知った私は、将来に不安が募っていきました。このまま就農しても上手くやれない。そう考えた私は、畜産分野についてより深く学ぶために、西日本最大級の附属牧場を持つ宮崎大学農学部畜産草地科学科への進学を目指し、無事に合格することができました。

大学では畜産物生産から加工・販売までの横断的な学びに加え、宮崎大学でしか学ぶことのできない最先端の畜産技術を学んでいきました。充実した大学生活を送る中、大学1年時のある講義で教授がこう問いかけました。

「平成22年4月といえば、宮崎で何が起こりましたか?」

私は答えが思い浮かびませんでした。

「口蹄疫が発生しましたよね。」

と教授が答えた時、私ははっとしました。口蹄疫という言葉はもちろん知っていましたが、酪農

家出身で農業高校を卒業し、宮崎の大学で畜産を学んでいる私が口蹄疫の発生時期さえ知らなかったことに悔しさと焦りを感じました。我が家の約30㎞先の宮崎県えびの市でも口蹄疫が発生していたため、当時6歳だった私も何となく父が怯えていたことを思い出しました。「宮崎にいるからには口蹄疫について学ぶべきだ」と感じ、口蹄疫を経験された宮崎県畜産職員の方の特別講義を受けることにしました。特別講義では口蹄疫発生から終息が宣言された僅か4か月の間に297,808頭もの尊い命が奪われた事を知り、衝撃を受けました。口蹄疫によって辛い思いをしたのは生産農家だけではありません。農家に殺処分通告をしなければならない県職員の方々、今まで一生懸命救ってきた家畜たちを自らの手で殺さなければならない獣医の方々、非常事態宣言により客が減ったサービス業の方々、他にも沢山の業種の方々が口蹄疫により苦しい期間を過ごしたことを知りました。私は今の活気ある宮崎畜産業しか知らなかったため、口蹄疫からどのように立ち上がったのかを知るために口蹄疫メモリアルセンターに行きました。センターでは口蹄疫を経験された生産農家の方の話を聞くことができました。

「復興はゼロからではなくマイナスからのスタートだった。それでも、ここで終わったら悔いが残る。口蹄疫により失われてしまった尊い命のためにも、どげんかして（どうにかして）畜産王国宮崎を復活させなければならない。その一心だった。」

と、生産農家の方は仰っていました。口蹄疫後、宮崎畜産業は見事に復活を遂げ、和牛のオリンピックと呼ばれる全国和牛能力共進会では4年連続内閣総理大臣賞を受賞しています。口蹄疫により宮崎県内の約4分の1の牛が殺処分されたにもかかわらず、宮崎畜産業を復活させることができた事実を知り、宮崎県民の畜産業に対する誇りの高さと口蹄疫にも負けない畜産王国宮崎の力強さを実感しました。口蹄疫を経験した宮崎県民の方が

「言い方があっているか分からないけど、口蹄疫のおかげで県民が1つになることができた。」

と、仰っていたのを覚えています。課題があるからこそみんなが協力し成長できる。私は、酪農業においても、仲間と協力して課題解決に取り組むことが重要だと感じました。しかし高齢化や担い手不足により酪農家の数は年々減少しています。

そこで私は、高校教師として酪農の魅力を伝え、未来の酪農業を担う若者を育てたいと考えました。そのために、まずは自分が根拠を持って酪農の魅力を伝えられる存在になりたいと思い、畜産に関する資格取得に取り組むことにしました。より良い酪農経営を主体的に追求する楽しさを知ってもらうためのJGAP指導員資格取得をはじめ、家畜人工授精師や大型特殊・けん引免許の資格取得にも励んでいます。さらに、人手不足の酪農業において、スマート農業機器の活用によってより効率的に作業を進めることができる楽しさを伝えるために、超音波や3D画像を用いて繁殖状況・体重・肉質を推定する研究に取り組んでいます。未来の教え子たちと日本の酪農を盛り上げていくために、何事も学びだと捉えて残り1年の大学生活に励んでいきます。

牛を育て、牛に育てられてきたこの20年。酪農に対して色々な思いが交錯してきました。良い面も悪い面も知ったからこそ今「教師になりたい」という夢ができました。しかし、私にはもう1つの夢があります。それはいつか父と共に、我が家で酪農経営を行うことです。私が大学や

教師として学んだ最先端の技術と、50年間牛を育ててきた父の技術を組み合わせて、より良い酪農経営を目指していきたいです。また、教師として得たスキルを活かして体験型牧場を開き、地元の子供や非農家の方々が、気軽に酪農に触れ魅力を知る機会をつくりたいと考えています。そして、私が地元の消費者と酪農家を結びつけ、地域一体となって酪農業を盛り上げていくことが私の夢です。

「じゃあ、将来はお父さんの跡を継いで酪農をするの?」

今なら胸を張って答えられます。魅力もいっぱいだけど、課題もいっぱいな酪農。教師という道で生徒を育て、生徒に育てられることで酪農家としてさらに成長し、最終的には日本をリードする持続可能な酪農経営を行ってみせる。

「はい!継ぎます!酪農が大好きなので!」